



山梨県立  
吉田高校

学校改革

◎1937年、山梨県立岳麓農工学校として開校。50年に県立岳麓農工高校と県立岳麓高校を統合し、現校名に改称した。「純剛」「百折不撓」を校訓とし、「文武両道」を目指す。ウエイトリフティング部、音楽部、スケート部などが全国大会、関東大会で活躍。

<b>設立</b>	1937(昭和12)年
<b>形態</b>	全日制／普通科・理数科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約280人
<b>12年度入試合格実績(現役のみ)</b>	国公立大は、東京大、東京工業大、一橋大、山梨大、名古屋大、大阪大などに133人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、立命館大などに延べ597人が合格。
<b>住所</b>	〒403-0004 山梨県富士吉田市下吉田2075-2
<b>電話</b>	0555-22-2540
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.yoshidah.kai.ed.jp/">http://www.yoshidah.kai.ed.jp/</a>

# 学区撤廃を機に 学び合う教師集団の 形成を目指す

## 変革のステップ

### 背景

◎高校入試での学区撤廃に伴い、成績上位層が増加。進路指導の体系的な見直しが求められた

STEP 1

### 実践

◎「キャリアガイド」「3年の担任を囲む会」などで教師間の視線を合わせ、大学見学や卒業生の活用で、生徒の意欲を刺激

STEP 2

### 成果

◎過去最高の国公立大合格実績を記録。国公立大を目指す生徒も増え、学び合う教師の集団が生まれつつある

STEP 3

## 長い低迷期を脱し 過去最高の実績を実現

山梨県立吉田高校は、2012年度大学入試において、同校の過去最高実績となる133人が国公立大に現役で合格した。09年度の66人と比較すると、3年間で2倍に増えたことになる。躍進の背景には、07年度に行われた山梨県の公立高校の入試制度の変更があった。総合選抜が廃止されて全県一区となったことで、山梨県東南部を代表する進学校の同校に、成績上位層がいつそう集まるようになり、それに対応するため、進路指導の見直しが求められたのだ。

同校は地域の進学校として、古くから地元への期待を背負ってきたが、実は1980年代までは進学実績の低迷に苦しんでいた。低迷から脱する最初のきっかけをつかんだのは、91年度の理数科設置だった。総合選抜とは別枠で理数科を設けたことにより、成績上位層が志望しやすくなった。その結果、大学合格実績は徐々に上向き始め、国公立大に毎年60〜80人が合格するようになった。当時を知る進路指導主事の長田茂先生は、その頃の状況を次のように振り返る。

「当時の普通科には、学習から学校行事に至るまで、『打倒、理数科』という雰囲気がありました。理数科が実績を出すと、それに引っぱられる形で普通科の成績上位層も頑張

る。ある学年が実績を出せば、次の学年も奮  
い立つというように、学級間、学年間で切磋  
琢磨する雰囲気がありました」

理数科のみならず、普通科も進学実績を伸ば  
したことで、総合選抜の廃止を機に、「入りた  
い高校」として更に多くの中学生に意識される  
ようになったのである。



山梨県立吉田高校  
**長田 茂** おさだ・しげる

教職歴24年。同校に再赴任して4年目。進路指  
導主事。「何事にも粘り強く、諦めないで取り組  
む生徒を育てたい」



山梨県立吉田高校  
**飯室 毅** いむろ・つよし

教職歴22年。同校に赴任して2年目。進路指導  
部副主任。2学年担任。「率先垂範。信念を持っ  
て高い志の下に継続する姿勢を生徒に示したい」



山梨県立吉田高校  
**三浦 浩一** みづら・こういち

教職歴28年。同校に赴任して2年目。1学年主任。  
「生徒に正解のない問題に取り組ませ、打たれ強  
い人間に育てたい」



山梨県立吉田高校  
**小松 秀幸** こまつ・ひでゆき

教職歴26年。同校に赴任して21年目。2学年主任。  
「授業では授業に、部活動では部活動に、他の時  
間はその内容に集中するよう、生徒を支援したい」



山梨県立吉田高校  
**小俣 義一** おまた・よしち

教職歴26年。同校に赴任して3年目。3学年主任。  
「何事も最後まで諦めない。同僚の先生と生徒た  
ちと一緒に頑張っていきたい」

## 成績上位層向けの指導にシフトし 学校行事も精選

学区撤廃後の指導は手探りで始まった。2学  
年主任の小松秀幸先生は当時をこう振り返る。

「成績上位層の増加は予想していませんでしたが、  
どの程度増えるのかは分かりませんでした。  
また、成績上位層が増えたとしても、生徒の  
学力差がなくなるわけではありませんし、生  
徒全員が国公立大志望者であるとは限りませ  
ん。どこに狙いを定めて授業を行えばよいの  
か、進路指導の力点をどこに置くのか、実際  
に入学した生徒の様子を見ながら、ふさわし  
い指導を模索していきました」

まず、検討課題となったのは普通科の学級編  
成だった。普通科には、それまで国公立大入試  
対応の学級が2クラスあったが、全県一区での  
入試となった1年目の07年度は、8クラスのうち  
3つを高習熟クラスとした。しかし、予想以  
上に国公立大志望者が多く入学したため、08年  
度からは全クラスを「フラットクラス編成」と  
し、学校全体で国公立大入試に対応する指導へ  
と転換した。

次に、家庭学習時間の確保のため、学校行事  
の精選も進めた。08年度に始めた家庭学習時間  
調査の結果を見て、学習時間数が落ち込む時期  
を中心に、学校行事の内容の見直し、時期の調  
整などを行った。

この家庭学習時間調査は、生徒把握を目的と  
して、進路指導部が担任に月2回の調査を依頼  
したのが始まりだった。現在は、家庭学習をし  
た教科とその時間を毎日、週末には1週間の  
反省も書いて提出させており、大半の担任が生  
徒とのコミュニケーションツールとして活用し  
ている。2学年担任の飯室毅先生は、次のよう  
に取り組みを評価する。

「家庭学習時間調査は、毎日の生徒の状態  
を把握するためだけでなく、気になる生徒  
に対してピンポイントで面談をする資料にも  
なり、限られた時間における効率の良い指導  
につながります。生徒には、日々の生活を振  
り返らせることで、起床時刻、就寝時刻、学  
習の開始時刻の三点固定を意識させつつ、今  
の自分に何が必要かを考えさせるようにして  
います」

担任であっても、担当教科によっては授業で  
クラスの生徒と接しない時もある。授業での様  
子が分からない生徒の日常を把握するためにも、  
家庭学習時間調査は欠かせないという。

## 異学年間での交流の場を持ち 互いに指導法を学び合う

教師間の指導の目線合わせにおいても、同校  
はさまざまな工夫をしている。その1つは、学  
年ごとに作成する「キャリアガイド 生徒版」

\*プロフィールは2012年3月時点のものです

だ。これは、学校生活の心構え、家庭学習の仕方、定期考査や模試の活用法、大学入試対策などを紹介する冊子で、生徒にとっては日々の活動の指針となるものだが、教師の指導方針の平準化のための共有資料としても活用している。

この冊子は09年度に初めて作成して以降、毎年、各学年の新年年団が旧学年団から意見を聞いて、改良したり、新しい資料を挿入したりと、改訂を重ねている。この作業によって、学年団で1年間の進路指導の流れを改めて確認し、先を見据えた指導に結び付けている。

国公立大の前期試験の合格発表後に行う「3年の担任を囲む会」も、教師間の指導の目線合わせのために欠かせない取り組みである。ここでは、1・2年生の学年団が、卒業生を送り出したばかりの3年生の学年団から大学入試や受験指導の最新情報などを聞き、ノウハウを共有する。

「大学入試の状況や生徒の様子は、毎年変わっていきます。教師にどれほど経験があったとしても、常に学ぶ姿勢を持たなければ環境の変化にはついていきません。3年生を送り出した先生方の指導経験は、たとえ若手教師の意見であっても参考になることが少なくありません。経験の差に関係なく学び合える貴重な機会だと思います」（飯室先生）

12年3月に開いた「3年の担任を囲む会」では、高い進学実績を上げた10年度の3年生担任

だった教師の多い現1年生の学年団も全員参加した。これは教師の意識の高まりの表れだと、1学年主任の三浦浩一先生は話す。

「特定のクラスではなく、どのクラスも国公立大を目指すフラットクラス編成となり、たとえそれまで実績を出していたとしても、過去の指導経験だけでは通用しないこともあると感じています。1学年団全員が『3年の担任を囲む会』に参加したのは、他学年の取り組みも積極的に吸収していこうという意識を担任一人ひとりが強く持っているからだと思います」

更に、次年度に3年生を受け持つ若手教師が、指導のノウハウと考え方を学ぶために、3年生の志望校検討会に参加することもあるという。このように、教師が積極的に自己研鑽に励む背景には、生徒の進学意欲の高まりがあるという。11年度に3学年主任を務めた小俣義一先生は、次のように述べる。

「本校では、全県一区に入試制度が変わってから、入学時から国公立大を志望する生徒が年々増えていきました。志望大に入るために本校に来たという生徒や、自分でやりたいことを調べて早くから目標を定める生徒もいます。こうした生徒の高い志を3年間持続させ、入学時以上に学力を伸ばして卒業させたいという思いを、多くの教師が強く持つようになりました」

1年生時の国公立大志望者の割合は、07年度以降大きく増え、小俣先生の学年は、3年生になっても志望大を変更することなく、8割以上の生徒が最後まで国公立大を志望し続けた。生徒と教師が共に最後まで諦めず頑張ろうとする雰囲気、12年度入試の結果に結び付いたのである。

## 生徒の意欲を高める 卒業生からのメッセージ

入学時から高い志望を持つ生徒たちだが、その意欲を維持するだけでなく、更に高めるための働き掛けにも、同校は注力している。

09年度に始めた、1年生の2学期に行う大学見学会では、1年生全員が東京にある難関大を訪れ、模擬授業や実験に参加したり、卒業生の案内でキャンパスを見学したりしている。同校は首都圏から比較的近いものの、生徒が東京に出る機会は少ない。大学での体験や学生の姿に刺激を受け、志望意欲を高める生徒は多いという。

また、卒業生の活用も重視している。進路指導部が発刊する「朝日子だより」では、現役大生や就職した先輩に、大学での学びや仕事の内容、志望実現までの過程を紹介してもらっている。月1〜2回の土曜講座（オープンスタディ）でも、卒業生が3年生に合格体験談を伝え



### 5月 行事予定と進路目標

行事予定

時期	学校行事	学習進	内容
上部	ゴールデンウィーク 4月30日～5月5日		長期休みに入ります。 気の緩みや学習が疎かになる時期です。学習時間の確保をお願いします。 (長期休みの過ごし方は資料参照)
中部	高校説明		保護者多くで生徒が参加して行われます。また、父兄会などの活動は成長に行きます。
	オープンスタディ (1・4日)		・自学自習を行い、個別に教員が答えを。 ・本校教員による講座を開催する機会があります。
下部	OSオープンスタディ (10日)		OSオープンスタディ (10日) 実施します。
	OS (2・1日)		・スタディーサポートの授業について講座を行います。
	到達テスト (2・3日・2・4日)		入学後の学習到達度を把握します。 ・この到達テストは5時間以上の授業科目で行います。
	家庭学習 (2・5日)		高校で初めての授業です。 ・演習・実習の学習を行います。 ・各教科の学習 (国語) や専攻分野・実習分野に注力してください。 (保護者の学習の資料を参照)

※ OSオープンスタディの開催です。  
(土曜日を生徒の学習補助を支援する日として活用しています。)

#### 進路目標

##### 基礎力養成期

- ◆ 基本的な生活習慣・家庭学習習慣の確立
- ◆ 予習・授業・復習の学習リズムの確立
- ◆ 部活動と勉強の両立の意識を確立
- ◆ 起床・学習開始・就寝の3点を固定

### 進路Guide

#### ゴールデンウィークの過ごし方

①自分で時間を管理して、計画的な学習スタイルを確立させてください。  
②決して睡眠時間を削るような時間の管理はさせないでください。  
③問題を解き、答え合わせ、そして解説を独力で読むことで自分の実力がアップするプロセスを体験させてください。  
④入学からの苦手分野を見つけて、何を重点的に取り組むのか考えさせてください。

#### 模擬試験について

①定期試験ではあまり測ることのできない実力や応用力を測ります。  
②全国規模で実施されているので、校内だけでなく全国での自分自身の実力や位置を確認することができます。  
③本校では年に5回の模擬試験に全員の生徒が参加します。  
(2・3年生になれば、回数も増えていきます。)

※年間計画や模試の成績表の見方はP26を参照してください。

子どもとの対話で育った言葉は...

「キャリアガイド 保護者版」は学年ごとに毎年4月に発行。見開き2ページを1か月分として、行事予定や進路目標、行事などに応じた進路方針を掲載している  
\*学校資料をそのまま掲載

ド 中学生版」をオープンスクー

地域に対しては、「キャリアガイ  
いがにじむ。  
係を築きたいという教師たちの思

毎年4月には学年別・文理別に  
保護者向けの進路説明会を行うが、  
その出席者数は毎回1学年につき  
200人を超える。そうした保護  
者の熱意を学校への協力につなげ  
るために、11年度から配布してい  
るのが「キャリアガイド 保護者  
版」(図)だ。学年ごとに月別の行  
事の一覧、進路目標、保護者とし  
ての心掛け、子どもへのアドバイ  
スの仕方などを紹介した保護者用  
進路シラバスだ。「保護者の協力な  
くして進路は実現しません」「学力  
を向上させる学習法は、学校と家  
庭の連携で生まれます」といった  
メッセージに、保護者との協力関  
係を築きたいという教師たちの思

掛けている。

同校は、保護者や地域に対しても丁寧に関

## 改革に取り組み続ける 保護者や地域にも働き掛けながら

体験談を語る。先輩の姿は在校生の意欲に結  
び付き、好循環を生んでいます」(小俣先生)

るのだろう。

校。そうした姿勢が大きな飛躍に結び付いて

教師間の引き継ぎに生かす予定だ。  
実績におごることなく、改善を続ける吉田高

「進学実績が落ち込んだ時代に逆戻りしな  
いたためには、不断の改革に取り組む一方で、  
学校の取り組みを広く知ってもらうことも大  
切です。実績と信頼を積み重ねることに時  
間が掛かりますが、崩れるのは一瞬です。そ  
の危機感を常に意識しながら、取り組みを改  
善し続けていくことが大切だと考えていま  
す」(長田先生)

成績上位層が集まる同校であっても地域への  
働き掛けに力を入れる理由には、教師の危機感  
がある。

に親しみやすい形式に改めた。

12年度は、在校生による学校紹介、高校での一  
日の流れ、生徒が書いた似顔絵付きの先生紹介  
などを、A3判両面程度の量にまとめ、中学生  
に親しみやすい形式に改めた。